

第1回 浜松市未来デザイン会議 議事録

平成25年9月29日（日）午後2時～4時35分

浜松市役所本館8階 全員協議会室

1 開 会

(事務局) ただ今から第1回浜松市未来デザイン会議を開会します。
まず、浜松市長から、委員にご就任いただいた皆様へのお礼とあわせて、
ご挨拶を申し上げます。

2 浜松市長からお礼の言葉

(鈴木市長) 皆様こんにちは。本日は日曜日にもかかわらず、第1回浜松市未来デザイン会議にご出席を賜りありがとうございます。またこの度は委員を引き受けていただき、重ねてお礼を申し上げます。今回の浜松市未来デザイン会議は、これから浜松市が総合計画を策定するに当たり、30年後の浜松の理想の姿を皆さんに考えていただくという、今までやったことのない壮大なプロジェクトです。今回の委員の皆様は、幅広い年齢層から参加していただいています。浜松市の審議会等でお馴染みの先生方もいらっしゃいますが、是非、経験と今までに培った知識を駆使して、次代に伝えるという思いでご提言をお願いします。今回の特徴は特に若い皆さんに参加いただいております、まさに皆さんが未来を担う中心になるわけで、皆さんがこれからのまちをどうしたいか、どういうまちになってほしいかということについて、しっかりご意見をいただきたいと思っております。本日は三菱総合研究所理事長の小宮山先生にお越しいただきました。先生とはプラチナ構想ネットワークで一緒させていただいていますが、いつも示唆に富んだご意見をいただいております。今回は基調講演をいただき、我々がこれからスタートするに当たり、貴重なご意見、ご提言をいただければと思っております。この会議は1年間の長丁場となりますが、皆様には忌憚のないご意見をしっかり発言していただき、この会議を推進してください。この会議を未来デザイン会議という名称にしたのも小宮山先生の著書の中で、「未来を予測する最良の方法は未来を創り出すことだ」というフレーズがあり、そういう意味で浜松の未来のデザインを皆さんで考えていただこうと、こういう名称を付けました。そのような趣旨をご理解いただき、一年間よろしく申し上げます。

3 委嘱状交付

(事務局) 続いて、今回の未来デザイン会議委員の皆様へ委嘱状が出ています。委員を代表して、静岡文化芸術大学の石倉達也さんに浜松市長から交付させていただきます。

石倉さん前へお越しく下さい。なお、他の皆様には、事前に席上に配布させていただいているので、ご確認ください。

(市長による委嘱状交付)

(事務局) ありがとうございました。席にお戻りください。

4 基調講演 (事務局)

次に、未来ビジョン策定に当たり、アドバイザーをお引き受けいただいた株式会社三菱総合研究所理事長小宮山宏様にご講演をいただきます。

今回の「未来ビジョン」は30年後の浜松市のあるべき姿を定めていただくものです。これから先の30年は、後ほど事務局から詳しく説明しますが、人口減少、超高齢社会が到来します。小宮山理事長は、これからの社会を「プラチナ社会宣言・世代を越えて、みんなが活躍できる社会」と捉え、次世代社会のモデルを提唱されています。

本市では、この考え方を元に「未来ビジョン」策定の助言をいただくため、小宮山理事長にアドバイザーをお願いしました。

(資料2 小宮山氏経歴紹介)

未来ビジョンを策定する浜松市へのメッセージとして、基調講演をいただきます。では、小宮山理事長、よろしくお願いいたします。

(小宮山アドバイザー) 【演題】

日本「再創造」～プラチナ社会実現のためのイノベーション～

・以下、講演概要

【I 世界の現状 21世紀とは何か】

- ・1000年前の1人当たりGDPは、世界中であまり差がなかった。
- ・産業革命により生産性が向上し、先進国と途上国の差が生まれた。
- ・最近10年程度で途上国の生産性が向上し、先進国と途上国の1人当たりGDPの差が縮む方向で進みつつある。

- ・1900年の世界の平均寿命は31歳であった。
- ・昨年は70歳にまで伸びている。先進国の平均寿命は78歳である。
- ・人類の高齢化は急速に進んでおり、活力ある長寿社会づくりは人類共通の重要なチャレンジである。

- ・先進国の人口当たり自動車保有台数は概ね0.5である。これは2人に1台車を所有すると、もうこれ以上は需要が増えないということである。
- ・途上国市場においても、いずれ人工物の飽和は起こる。

- ・産業革命の普及と豊かさの格差・縮小、人類の長寿化と人工物の飽和。私たちは「人類の転換期」を生きようとしている。

【II 日本再発見 日本の歴史的偉業】

- ・日本は欧米以外で唯一の先進国である。
- ・鎖国後、どの国の植民地にもならず、一気に先進国になった。
- ・江戸時代から教育の基盤があり、治安が安定し、情報伝達の仕組みがあり、ものづくりを行っていた。既に途上国ではなかった。
- ・高度経済成長期以降、日本は公害の克服という偉業を達成した。
- ・技術革新により、どの国よりもエネルギー効率を上げ、石油の価格上昇

を克服した。

- ・次は、ものづくりの分野でなく、家庭・オフィスにおいてエネルギー効率の上昇に取り組むべきである。
- ・現在、日本は少子高齢化という問題についても課題先進国である。自分たちの課題を解決すれば、世界に新しいモデルを示すことができる。
- ・自動車や家電は普及すれば需要が飽和する。これが飽和型の需要である。
- ・課題解決に向けた新しい需要を創造して、これからは、課題解決に向けた創造型需要が鍵をにぎる。需要に応じた産業を作り、新しい社会を作っていく。これが創造型の需要であり、これからの産業の考え方になる。

【Ⅲ 21世紀のビジョン「プラチナ社会」 先進国が目指す成長モデル】

- ・モノが満たされたら、人は質を求める。
- ・人類が80歳まで生きられるようになり、どう生きるかという「質」を求める時代となっている。自身で欲しい質を求めていくというのがプラチナ社会である。
- ・プラチナ社会の需要は、人が親しめる美しい生態系というのが1つの目標になるのではないか。

- ・日本は地下資源がない国であるが、これからは、エネルギーを自給すべきである。そのためには、まず省エネ。再生可能エネルギー利用促進。
- ・自動車の燃費向上などが良い例であるように、エネルギー消費の全量を減らすことにより、自給の可能性は高まる。建物も断熱の良いものを建築することにより、エネルギー消費はまだ減らすことができる。

- ・金属は採掘からリサイクルに変わっていく。鉱山から金属を取り出すよりも、リサイクルをした方が効率が断然良いためである。

- ・日本は資源自給国家を目指すべきであり、日本のように石油や石炭が出ない国がエネルギーを自給していくというのが地球全体の向かうべき姿である。

- ・スマートグリッドは必要となる。これからは、エネルギーの主力が再生可能エネルギーに変わっていく。大きな発電所から電気を供給するのではなく、あちこちで電気が生み出されることになる。これをいかに効率よく安定して供給するか、情報技術を総動員して、新たな産業が生まれる。

- ・高齢社会が到来し、医療・介護が新たな産業と言われているが、そうではなく、健康と自立を目指し、すそ野の広い産業構造を図るべき。
- ・8割の人は長期の介護にならなくて済むという調査結果が出ている。
- ・長期の介護が必要となった2割の人を支援していくための産業が生まれてくる。そして、8割の人が健康を維持・向上するための産業も生まれる。
- ・断熱住宅に居住している人の有病率が激減しているというデータもある。冷暖房のエネルギー効率も上がるため、クオリティオブライフの向

上と省エネルギーという2つのメリットがある。イノベーションの起点になり得る。

- ・ 予防医療も重要となる。個人のクオリティオブライフを向上させることはもちろんであるが、国の財政負担も減る。
- ・ 高齢社会が進展すると、65歳以上の人に年金を給付し、今と同程度の医療費がかかるとすると、消費税率を40%にまで上げる必要が生じる。
- ・ 経費を減らして負担を減らす社会をどうやって作っていくかというのが、高齢社会のチャレンジである。

- ・ 人間は社会的動物であるため、人との交流、絆が不可欠である。足の筋肉が弱って買い物に出なくなる人などを支援するため、歩行支援ロボットの開発も進んでいる。
- ・ 乗降客数の少ない中山間地域の路線バスを廃止し、オンデマンドバスに切り替える実験をしている地域もある。実施方法にもよるが、路線バスを継続するよりも安価で運営できる場合もある。

- ・ これまでのまちづくりは国が主導で画一的に進めてきた。しかし、生活の質を上げていこうとする時には、質に対する要求は北海道と九州で違う。まちのつくりも違うから、自分たちで考えるしかない。
- ・ これから面白い社会になる。国がやってくれないからとっているところはダメになる。プラチナ構想ネットワークを自治体の連合として作り、それに産業や大学が協力していくという形で始めた理由がそれである。

- ・ 第1回プラチナ大賞を行い、120件程度の応募があり、大賞をとったのが海士町である。優秀賞が、上勝町、富山市、徳島県である。後から調べてみると過疎がいちばん進んでいるのが中国地方、日本海側、四国である。条件的に厳しい地域では様々な工夫が生まれる。
- ・ 浜松は条件的に恵まれすぎている。「やрмаいか」と言っているが、やる気がない。だから危ない。東京近郊の都市は危機感が足りない。柏市は実験都市に取り組んでいるが、人口の増えている地域は危機感がない。

- ・ プラチナ社会とは、エコロジー、心もモノも豊か、文化や芸術、多様性、といったものが必要条件と考えている。
- ・ GDP抜きではいけないだろうが、昔の所得倍増計画の頃とは違い、GDPが上がってもあまり幸福感と結びつかないのが先進国である。
- ・ さらに、参加型社会であることが重要である。ボケ防止のため、高齢者が社会から孤立しない社会とする必要がある。
- ・ 未来デザインに向けては、SWOT分析に基づいた地域戦略立案が必要である。浜松市の分析は見たが、もっと深く、モノづくりが得意であるというだけでなく、モノづくりの何が得意なのか、というところまで分析することにより、新しい何かを作っていけるのだろうと考えている。

- ・ アクションプランをフォローするために、常勤の構造化チームを作ることを強く推薦する。また、取り組みの進捗等をWEBにリアルタイムで入力し、公表していくことが重要である。
- ・ 構造化チームとは、個別の施策や取り組みを見える化し、お互いの連携

を進め、常にオープンイノベーションの環境づくりを進めるような機能を有する組織である。

- ・浜松市未来デザインのテーマ例として、再生可能エネルギーはチャンスがある。買い取り価格は下がっているが、それでも利益は生まれる状態になる。屋根貸しの制度に市民ファンドを組み合わせるなどするモデルを始めている地域もある。浜松は日照時間も長いため、チャンスがある。風力発電にも適しているの。農林業の再生も重要である。
- ・浜松市未来デザイン会議は、21世紀の浜松を良くするためのプランをつくる作業であり、これは世界の人類を引っ張る作業である。これ以上やりがいのあることはない。頑張してほしい。

(事務局) 小宮山理事長、ありがとうございます。それではここで、委員の皆様から質疑をお受けします。質問のある方は挙手いただき、指名の後、発言をお願いします。

(酒井委員) 私は学生時代、半導体が専門で、ちょうど太陽電池の講座にいたので大変勉強になりました。質疑として正しいかどうか分からないけれど、プラチナ社会と名付けられた意図をお聞かせください。

(小宮山アドバイザー) 良いものが中々出てこなくて、最終的にこれでいこうとなったわけですが、理由付けをすると、例えば高齢社会はシルバー、環境はグリーン、情報社会のことをレッドという人がいます。良い社会を作るにはイノベーション、変えていくのが不可欠です。そうすると7色のイノベーション。虹の7色が混ざると白色光になります。威厳のある輝き、そうするとプラチナだろう、というような語呂合わせに近いような発想です。クオリティの高い社会というのを、威厳のある輝きのある社会といってもおかしくはないという思いです。

(鈴木委員) 話を聞いていて、こういう世の中になったら良いな、まちになったら良いなというものが見えた気がしました。では、今の時点で、すぐにうまくいかない理由というのは、どんなところが一番ネックになっていると思われますか。

(小宮山アドバイザー) 大変良い質問です。まず浜松を考えれば良いと思います。やる気がありません。例えば新潟なんかもやる気がありません。市長や県知事は色々おっしゃるが、新潟県というのは明治維新の時はコメが沢山獲れたから日本で一番豊かだったらしいです。今でも結構人口も多いし、危機感がありません。規制改革がネックということもありますが、まずやる気がある人がいなければなりません。よく「よそ者、若者、馬鹿者」と言います。内輪で議論していてもダメで、よそ者が入ってきて、あいつは何で得にもならないことをやっているのかというような馬鹿者がいないとダメです。それから若者が入らないとダメです。ここは若い人が多いからいいなと思っています。やる気がある人のグループによそ者が入って、多様な議論ができます。これが一つ。法による規制もありますが、今の法体系でも前に進めることはいくらでもあります。あとはファイナンス。お金が必要だから知恵が要ります。例えばファンドの仕組みを作って出資するというような賢

さが必要です。それはいくつかあります。ファイナンスとか、スタートするグループ、規制を越える知恵だとか、色々必要だと思いますが、少なくとも今の規制があっても、今の財務状態でもできることは沢山あると思います。そう思う人がいなければ進みません。みんな国がやってくれないかな、市がやってくれないかな、早く決めてくれ、ばかり言っています。ほとんどのことは自分で決めれば良いのです。

(松本委員)

私は、浜松出身で関西にある三菱重工の研究所に勤務しておりました。3.11の関東大震災で日本が変わりました。私は、入社当初より原子力関係の仕事に従事しており、「原子力は安全だ」と思って、張り切って仕事をしておりましたが、この事故で発想が変わってしまいました。今先生のお話を聞いていて感じたことですが、北遠地方には森林があり、これは三大人口美林の一つで、浜松はそれを大いに利用できます。また工業に関しては、これまで浜松を支えてきた既存のものもありますし、新分野のものもあります。それから、商業も農業も盛んで、小規模なのは漁業くらいです。そういうことで、浜松は高い潜在能力を持っていると思いますが、小宮山先生が言われたようにやる気がありません。皆でやる気を出してやっていくためには、下からというよりも上からも、両方でやっていかなければならないと思いますが、どのようにお考えでしょうか。

(小宮山アドバイザー)

おっしゃるとおりです。上からと下からと両方だと思います。先行事例を作るのが必要です。誰かが先行事例を作る。浜松はやる気がないと言いましたが、よく探せば色々あると思っています。そういう全国、海外も含めた先行事例を見ながら国が規制の緩和をしていかないといけません。規制改革の議論では、心配が先に立ち、誰が責任を持つのかという議論になってしまいます。ところが先程の海士町は2,000人しかいないし、上勝町も1,800人しかいない。まわりが顔見知りで悪いことは起きにくいから小さいところの方が規制改革をやりやすい。小さい所でやってみせて、国と地域とのキャッチボールをして進めていかないと上手くいかないのではないかと感じています。同じようなことが市の中でも言えます。幸いにしてここはやっていこうという動きになっていますから、ここにアイデアを持ったグループと、支援する地銀や信用金庫などのファイナンスが必要です。年金のファンドは日本で250兆円あります。もちろん直接投資はできませんが、工夫次第で投資可能です。例えば先ほど言った太陽電池に投資する、発電事業に投資するのは、ほとんどリスクはありません。市民ファンドでもいいし、年金が出資して会社を作ってメガソーラーや屋根貸しの事業をするような仕組みは浜松なら絶対できます。80万人の豊かな地域であればできると思いますが、知恵を持ってやる気のある人が必要です。

(事務局)

それでは、時間の都合もあるのでここまでとします。もう一度、小宮山理事長へのお礼の意味を込め、盛大な拍手をお願いします。

(拍手)

小宮山理事長、ありがとうございました。

5 浜松市未来ビジョンについて

(事務局)

次に、皆様に策定いただく浜松市未来ビジョンの策定方針、デザイン会

議の役割、人口推計、今後の進め方などについて、事務局から説明します。

(資料4 資料5 資料6 に基づき説明)

(事務局) ただいまの説明について、委員の皆様から質疑を受け付けます。質問のある方は挙手いただき、指名の後、発言をお願いします。

(松本委員) 3ページに「策定に向けた認識すべき注意点」というのがあります。この中で4ページに「農業ビジネスの拡大」というのがあります。何故、農業なの でしょうか、農林業ではないのでしょうか。政府が2009年に「森林・林業再生プラン」を作りました。この中に「10年後に現在の木材の受給率 20%弱を50%以上に持っていく」とありますが、北遠に豊かな森林資源を持つ浜松市が、30年後の計画を作る時に、これが考慮に入らないのでしょうか。

(事務局) おっしゃるとおりだと思います。SWOT分析をする時には林業も将来性のある分野だと思いますので、計画を策定するに当たっては、浜松の強みになると捉えています。

(松本委員) 3ページの「策定に向けた認識すべき注意点」の①、②に人口減少やライフスタイルの多様化とありますが、これは、日本全体のことを言っております。この会議を始めるに際して一番大切なことは、浜松の人口が減少しないようにするためには、どうすればよいかを考えることだと思いますがいかがでしょうか。この問題については、この会議が進む中で考えていくというのならそれでよいのですが。

(事務局) 人口減少を止めるのは不可能だと思いますが、平成57年までに13万人減るのを食い止めたとは考えています。しかし認識すべきものとしては全国的傾向としてこうなっているということで、市場も縮小するだろうし、活力も失われる可能性があります、そのためには、前提として何をすべきなのかという問題として記載しています。そもそもこれ自体がそうならないように、危機は危機と認識しながらどういう手を打つかということであると考えています。

(松本委員) では、この会議が進む中で考えていくということによろしいのですか。

(事務局) そのとおりです。

(鈴木委員) 会議自体のことですが、言いつ放しでは良くないと考えています。言ったけどどうなったか分からないという問題もあると思います。この会議の進め方、関わり方が分かりにくいです。小グループを作ってプランを作ってみるなど、手間はかかりますが、会合に出てきて思ったことを言うだけで良いのか、それとも、もう少し踏み込んだところまで突っ込んでいくのか、どんな関わり方をしていけば良いのか、どういうつもりで関われば良いのか、具体的に構想があれば教えてください。

(事務局) 職員としても必死でやるけれども委員の皆様にも、この後説明しますが

宿題などをお願いします。決めたことについて了承をいただくような会議にするつもりではありませんので、積極的にご提案ください。

(杉山委員) 私たちの作業の確認ですが、私たちが作っていくのは、30年の基本構想が浜松市の未来ビジョン、浜松やらまいか総合プラン新10年の計というのが、基本計画で、それは市役所の方が作ってくれたものを確認することですか。私たちが作っていく未来ビジョンは冊子にまとめるのですか。

(事務局) そのとおりです。今後どうまとめるか内部で議論はしなければいけません。市民と共有できる形にします。インターネットでも公開し、成果物として見られるようにします。

(杉山委員) 市民に見ていただいて、その結果どうなったかという評価はどうしていくのですか。

(事務局) 戦略計画という計画を毎年作っています。基本構想という漠然としたものではPDCAはできませんので、具体的な政策、事務事業については、戦略計画をもとに評価を現在もやっていて、公表しています。

(杉山委員) どこで公表していますか。

(事務局) インターネット、報道発表で公表していますが、もう少ししっかりやらなければいけないと考えています。

(松尾委員) 市の方で止めない限り突き進むということで委員会が進めば良いと個人的に思っています。パブコメの話がないので、チェックを心配されたのかと思います。パブコメをするにしても、やっているよということが伝わりにくいということもありますので、改善することを含めながら、この中に織り交ぜていただくと、議会だけでなく、もっと多くの市民の意見が受け入れられるように絵が描ければ、良いと思います。

(事務局) 市民に長期にわたって関係することなので、パブリックコメントについても、新聞や広報に載せたりするなど、広報については徹底してやりたいと思っています。

(酒井委員) 部局長さん以上かと記憶していますが、マニフェストという形で毎年出されているかと思います。それと、未来ビジョンが違ってきた場合、この会議がそれに影響を与える可能性もあるという理解で良いですか。例えば市長がマニフェストとして出されているもの、それが基本方針というものを経て、今後変わってくる、それぐらい影響を与えるものだという理解で良いかということですが。

(事務局) 30年基本構想はそれと矛盾するマニフェストがあり得ないわけではありませんが、マニフェストのような4年間でこれをやるという具体性は基本構想にはありません。基本計画は、より具体的な方向性を示します。ただこれは27年度からの計画なので、マニフェストを作るときに基本構想がマ

ニフェストに影響を与えることもありますし、逆にマニフェストが仮に基本構想と違うものであれば、基本構想を変更することは今後あり得ることだと思います。基本構想も30年間全く変わらないものでもありません。30年間もつもの、10年間もつものということで策定しますが、時代時代に応じて議決を求めて変更することは否定するものではありません。基本構想や基本計画は変えることは可能であると考えています。

(酒井委員)

もう一点、7ページに30年一世代と書いてあって、10年でやるべきことがあり、1年ごとのイメージがあります。基本的には同じベクトルでやっていくとなっていて、我々が30年の基本構想を描いたとして、それをバックトレースしていきながら、1年ごとに戻っていった時に、それがマニフェストとして反映されないものであれば、ここで話し合ったことは全く意味をなさなくなります。ブランドウの地点でコケてしまっているということになりかねません。ここで話し合ったことの内容に関しては1年ごとのマニフェストの中で反映してもらわないと困ります。厳しめな言い方で申し訳ないですが、お願いしたいと思って質問しています。

(鈴木市長)

大きな方向性で狂うことはあまり考えられないと思っています。前回の基本構想の中で唯一見直させていただいたのはクラスターという発想です。ブドウの房ということですが、合併したのに元の行政の枠組みを残してバラバラではいけないと考えています。私はむしろみかんのように、外側は一つだが、中が独立しているというイメージを持っています。そういう根本的な考え方の違いは多少ありましたが、基本的な目指すべき方向はあまり変わりません。もし矛盾が出た時は当然議論しますし、新しい方がやる時にどうするかという課題は出てきます。その都度基本構想と市長のマニフェストの整合性をとっていく必要があります。その時にはきちっと市民に示します。我々は選挙という試金石があるので、ダメなことをやっていたら選挙で落ちます。色んなフィルターにかけるケースが出てくると思います。

6 委員自己紹介

(事務局)

次に、委員の皆様、未来ビジョンにかける思いと合わせ、自己紹介をお願いします。まずは、次回会議から進行役を担当していただく静岡文化芸術大学文化政策学部長根本敏行様からご挨拶をお願いします。

(根本委員)

文芸大学の根本敏行です。小宮山先生とは同じルートをすれ違っていたという感じがします。僕の出発点は土木系の都市工学の研究でした。その後1983年から95年まで三菱総研で公共政策の研究をしていました。最初は数字、方程式みたいな、基盤整備。インフラといわれる、道路、鉄道、上下水道、電気、水道、そういうものをしていました。三菱総研に入ったのはちょうどバブルの絶頂期で、全国のリゾート開発、港湾の開発、明石海峡に橋を掛けたら何台車が走るかというようなことを若い頃やっていました。奇しくも95年の震災の年、たまたま関西で新しい学府を作るという話があり、兵庫大学の経済情報学部で教員の職を得ました。そこで震災復興をつぶさに見て、自分たちでNPOを作り、10年間まちづくりのお手伝いをしました。出発点は土木工学でしたが、かなり市民参加に研究テーマがシフトしました。そして2004年に縁があって地元の静岡文化芸術大学の大学院をつくるタイミングでこちらに移ってきました。今度は地域、これま

でもいくつか県や市の仕事をさせていただきましたが、最近のテーマは創造都市論です。先ほど小宮山先生の話にも先進国でモノが飽和してきて次は質だというのがありましたが、そういったことを最近の研究テーマにしています。この会のコーディネーターを任せられましたが、なかなか理想の形にいきなりいかないと考えています。限られた時間、限られた人間、発言したことが全て政策に活かされないかもしれませんが、だからといって我々は言いつ放しで良いということではありません。是非口うるさい外部ブレーンとして、皆さんと一緒に活躍していきたいと思えます。

(事務局) ありがとうございます。続いて長澤委員から時計回りにお一人1分程度で順に自己紹介をお願いします。

(長澤委員) 商工会議所の長澤です。地元の中小企業経営診断ということで相談業務を中心に活動しています。昨年度まで7年間、新産業創出の担当をしていました。その知識をこちらで活かせればと思っています。

(鈴木委員) 京丸園株式会社の鈴木厚志と申します。農業生産法人です。ここに参加させていただいたのは、農業を新しい産業に変えられないかと思からです。NPOを立ち上げ、それがユニバーサル農業ということも始めていて、今、浜松の中にもユニバーサル農業研究会というものを立ち上げました。農業と福祉を融合させて、新しい産業をデザインできないかという構想で動いています。行き先については、健康創造産業という産業に農業が移り変わっていくことで、農業が力強くなるのではないかと目指してやっています。そういった部分が30年後のビジョンの中に反映出来たらという思いを持って参加させていただきます。

(前田委員) 前田剛志と申します。TENKOMORIと申して、天竜これからの森を考える会という会で活動しています。普段は山で林業に従事しています。先生の話にあったように、中山間地や林業は日本全体で具合の悪いことになっています。問題の解決に当たって、ここにいる皆さんと一緒に一歩でも二歩でも先に進めれば良いと思っています。色々と考えて前に進んでいきましょう。

(須藤委員) 須藤京子と申します。私の肩書は、NPO法人浜松外国人子ども教育支援協会理事長となっています。今、浜松は外国人が非常に多くて外国人の子どもたちもたくさんいます。義務教育の授業について行けるように日本語の支援と、自分たちのアイデンティティを大切にしてもらいたいということで母国の文化、母語支援をしています。私は22年まで教育委員をしていました。基本構想の中に教育の分野は書かれていませんが、健全な人間は普通の暮らしをしていけば育つものという思いがあるかもしれません。現在教育の分野に関わる者にとっては皆さんの目は非常に厳しいものがあると感じています。そのとおりで反省もしなければいけないと思いますが、健全な人間が育つためには大人の社会のためめ努力が必要だと思っています。それを念頭に置きながらこれからの30年を一緒に考えさせていただきます。

(松尾委員) 静岡大学大学院工学研究科電気伝電子工学専攻の松尾と申します。専門として元々は電気エネルギー分野でアーク放電、ナノチューブの合成のよ

うなナノ素材の合成を研究していました。その後は電気エネルギー全般に移行して、今は主に再生可能エネルギー、特に太陽エネルギーの活用と省エネルギー化ということで、小宮山先生の講演にあったようなことをやっています。この地域は農業でいうとメロンのようにエネルギーを非常に使う作物を生産しているので、その省エネができないかとか、工業全般の省エネ化を含めて研究しています。是非、自立型のエネルギー社会を作りたいと考えており、スマートグリッドも一部開発しています。自立型、分散型のエネルギー社会を作りたいと思っています。

(佐藤委員)

聖隷クリストファー大学社会福祉学部の佐藤と申します。社会福祉の領域の中でも地域福祉というかなりレアなところを担当しています。私自身も実践と研究両方とも、まさに住民が主体となって福祉のまちづくりをいかに進めていくか、ということを中心にやっています。浜松は1980年代から住民参加型の自治会長さんや民生委員さんを中心にして、市民ボランティア参加の一人暮らし老人の孤立をいかに予防するかなどの実現に熱心に取り組んでいる地域で、そこが強みだと思っています。精神障害の問題でも、浜松は社会資本が沢山あって、全国でも有名な地域となっています。地域密着型、それからテーマ型、両方ともコミュニティという概念でくくれば、福祉でまちづくりが成立するのではないかと思っています。これから地域政策も進んでいくと思いますが、地域で培ってきた福祉のまちづくりをどうやってつなげていくかに関心を持っているので参加させていただきました。

(石川委員)

なかよし第2保育園の石川敦史と申します。保育園の園長をしています。近年では、色々気になることがあります。例えば虐待、子育て、少子化や、体罰、他にもありますが、特に今こだわっているのは私たち大人がもっと子どもたちの内面を見ていくことが必要なのではないかということです。途中のプロセスや、その子が本気なのか、やる気なのかということが大事なのに、結果ばかり気にすることによって人間関係が悪くなっている、そんな親子関係、教師と生徒の関係がよく見受けられます。そういったところを見直したいと頑張っています。子どものその気、やる気とか本気などを気にすることで自然と結果がついてくる、そういう話は、未来デザインもいかに本気になるか、やる気になるかというのが、結果としてついてくると思っています。結果ばかり気にしてやるのではなく、いかにみんなと工夫して知恵を出し合いながらその気になってやるのが大事かと思いつながりながら聞いていました。

(榊原委員)

榊原正之と申します。遠州鉄道に勤めています。百貨店、ストアとありますが、私の所属は運輸営業部です。バス・電車とありますが、専門は乗り合いバスです。戦后市営バスから移管を受け、一時期は会社の看板を背負っていましたが、現在は非常に厳しい状況です。少子化と、免許を持たない学生が減っているのが原因です。一方、高齢化でバスに乗る機会は増えると思いますが乗降に時間がかかったり、安全に問題があったりといったところは今一步踏み込んでいかなければいけない問題です。また中山間地域の問題は先生の講演にもあったデマンドバスという新たな形態のバスの問題があります。事業者の立場として、できる、できないということではなく、今回は皆様のご意見を聞きながら、今後の事業のあり方について勉強できればと思っています。

(田中委員)

自治会連合会の田中充といいます。浜松市には738の自治会があり、それを50の自治会連合会で支えています。今回の30年計画ですが、自治会というのは一般住民と直接関わりのあるところで、いかに市へ協力するかが肝要な組織です。浜松市の自治会結成率は現在96%で、全国一です。これは他に類をみません。私自身も大変な場所へ出てきたなと思っ
ていますが、浜松市も戦後68年かけて素晴らしい発展をしてきましたので、30年先といっても時代は違いますが同じようなつもりで再建に向かっ
ていかなければ、30年後の浜松はないというくらいに思っています。住民
と直接あたるところにいますので、市政運営には住民の協力なくしてでき
ませんから、それを主力にしていきたいと思っています。

(石倉委員)

静岡文化芸術大学学生の石倉達也です。今回応募したきっかけは、本
来、行政の市民参加を求めるという場で学べたらなと思っ
ていたのですが、8月に地域づくりインターンで奈良県の過疎地域に行き、そこで学び、中
山間地域の過疎の現状に関することに興味を持つようになり、今回の策定
では中山間地域からの立場の意見、そちらからのアプローチができたらと
思っています。前田さんや鈴木さんに近い意見かもしれませんが、住民に
特化した意見が言えればと思っています。

(河合委員)

浜松学院大学の河合美里といいます。地域共創学科に所属していて、授
業で浜松のブラジル人や経営について学んでいます。主に浜松地域の中小
企業や農業の勉強をしています。学校にもブラジル留学生や他の国の留
学生がいます。浜松は多国籍の人がいる地域だと思います。そのようなこ
とを皆さんと話し合えれば良いなと思っています。

(河原委員)

河原みち代と申します。委員の中では最高年齢の方かと思っ
ながらここにいます。30年後、絶対私は生きていない、きっと生きていない、多分生
きていない。でも新聞で100歳以上が54,000人いて、その9割は女性とのこ
とで、もしかしたら生きている、そこまで考えが及びました。浜松市を考
える若いも若きも男も女もみんな意見を出し合っ
て考えていくのは、とても大切なことです。若い人と一緒にいると、色んな意見が出るので、楽
しみにしています。未来ネット浜松の代表ということで公募委員になっ
ています。これは市制100周年を記念して100人で立ち上げましたが、現在男
性が1/3で会員は200名を越しました。男女が共に生き生きと住みやすい社
会浜松をつくろうということで、まさに未来の浜松市のまちづくりを進め
るために積極的な実践を続けています。これからの浜松を考えるに当たっ
て、今までの体験を生かして、残していくもの、残してはいけないもの、
変えていくもの、変えてはいけないものなどを精査検証しながら、未来の
浜松を考えるために努力していきたいです。

(酒井委員)

浜松ホトニクス株式会社開発本部PET開発グループに所属しています。
PETは脳を見たり、癌を発見したりする医療の現場で使う装置です。ま
た、普段は公益社団法人浜北青年会議所で活動しています。今回この公募
があることを知り応募しました。日曜日の休みにこれだけたくさんの市役
所の方を含め、記者の方々が傍聴されている、期待が大きなところに来さ
せていただいて、このような会を開いていただいた市長に感謝します。私
は1才2か月になる子どもがいて、その子が30年後、浜松に住んで良かった

と思える時代を築くために少しでも手を貸したい、勉強をしたいと思って参加しています。

(杉山委員)

静岡文化芸術大学学生の杉山琴音です。好きなゆるキャラは家康さんとふなっしーです。先日ショッピングモールに行ったら、グッズショップがくまもんで埋め尽くされていて、浜松市のショッピングモールなのに家康くんはどこへ行ったのかと思いました。くまもんは熊本を印象付ける何かを持っているので、浜松市を日本のどこかに、いろんな人に印象付ける新しいもの、今あるものなどを広めていけるようなまちづくりをしていきたいと考えています。

(外山委員)

外山佳邦33歳です。中小企業のブランディングを手掛ける株式会社55634という会社を運営しています。数字なのでよく聞かれますが、人の志を数字のように分かりやすく伝えたいという思いで、55634(こころざし)という語呂にあやかっています。去年起業しましたが、浜松で何故起業するのという人が東京にいっぱいいて、浜松で起業するのは恐くないのかと色々聞かれました。大企業にUターンする人はいると思いますが、浜松で新しい形で起業する人はそれほど多くないと思っています。KAGIYAビルという田町のまちなかで、3社でワンルームをシェアしています。こういう取り組みも年配の方は何でそれで起業できるのかと聞かれるので、そういう意味で、浜松がやらまいかという言葉だけで先導するのではなく、起業家が集まって起業家がどんどん生まれるまちになればと思っています。この会議は多分地域のブランド戦略を考える会になると思うので、勉強しながら発言したいです。

(西川委員)

西川裕太朗といいます。この会議に参加した理由としては、私は4年前に鹿児島から来ました。その際、親戚や知人に、なんで地震が今から起こる浜松に行くのと言われて、対策についても何もないんじゃないかと思っていました。来てみて、対策が色々されているのに、県外に対するアピールが弱いんじゃないか、と思ってこの会に参加しました。資料を見た限り、若者をどう盛り上げていくか、どうやって質を高めるかという問題に終始していると思いますが、私は質よりも県外から来る人の数を増やすのが一番重要だと思っています。若者視点から意見が言えたらと思って参加しました。

(松本委員)

松本曠世と申します。私の所属に静岡大学工学部非常勤講師とありますが、これは週一回しか行っておらず、後は「田舎暮らし」を楽しんでいます。化学工学を勉強しましたので、三菱重工の研究所に入り、原子力廃棄物処理や環境関連の業務をやっておりました。定年退職後は、天竜区春野町の山の中腹にある小さな部落に落下傘のようにして、見知らぬ土地に降りてきて、12年余になりました。いま、過疎化をしみじみと感じています。先ほど「浜松市未来ビジョンについて」の質疑の中の私の発言に関連しますが、私は人口が減るのは仕事がないからだと思っています。仕事があれば人口は増えます。また、仕事は与えられるものではなく、作るものだと思っています。

(村田亜委員)

村田亜希子と申します。今2歳の子どもがいて、平日は会社員としてフルタイムで働いています。私はやる気のない市民でした。自分が子どもを

産んで社会に復帰する時、課題を突きつけられた時に、このままじゃいけないと思ったのが応募のきっかけです。先日公募委員の面接に伺った時、女性職員が面接官の中に一人もいなかったことを疑問に感じましたし、市議会議員も3人と、女性が少ないです。人口は女性が半分いるのに女性の声がまちづくりに生きているのかを疑問に感じています。この中に教育や女性の起用という項目がなかったので、自分としてはそれが課題なので、その件についてもこの中で勉強したいです。やる気がないのではなくやり方がわからない女性や母親がとても多いと思うので、その方たちに自分の声で伝えていけたらなと思っています。

(村田昌委員)

村田昌樹と申します。OMソーラーという会社に勤めています。ソーラーといっても太陽光発電のソーラーではなくて、太陽光エネルギーを使って建物の温熱環境、先ほど小宮山先生の話にあった断熱住宅をまさに実現しています。家づくりというのは、個人の問題と社会の問題、エネルギーの問題と健康の問題を解決する方法なのだろうと、そういうことを提案しています。小宮山先生は先行事例が大事だとおっしゃっていましたが、公共施設の老朽化は単に物理的な老朽化だけではなく、使用方法まで含めたリノベーションができれば市の財産として有効活用されると思います。そういうことも提案できたらと考えています。

(事務局)

小宮山アドバイザーからコメントをお願いします。

(小宮山アドバイザー)

皆さんの自己紹介を聞いていて、来た甲斐があったという思いを強くしています。素晴らしいメンバーで、やる気がないと悪口を言いましたが、そんなことは全くなくて本当に期待しています。やる気がないのは恵まれているからと言いましたが、別の言い方をすれば地力があるわけですから、是非素晴らしい計画を作って、実践方法について話も出ていますし期待していますので、皆様も、市長も、頑張ってください。

(事務局)

では本日最後の議題となります、次回までにお考えいただきたいことについて、事務局から説明します。

説明（資料7 資料8）

(事務局)

それではここで、委員の皆様から質疑を受け付けたいと思います。質問のある方は挙手いただき、指名の後、発言をお願いします。

(質問なし)

(事務局)

事務局へ問い合わせいただければ、いつでも説明させていただくので、気軽に問い合わせてください。

8 閉会

(事務局)

これで第1回浜松市未来デザイン会議を閉会します。なお、第2回は11月2日土曜日、午後4時30分から、会場は本日と同じ全員協議会室にて開催し

ます。

それでは、気を付けてお帰りください。